

タミル語はインド島南部チェンナイ（旧マドラス）のあたりで話されていることばである。大野晋が『日本語の起源』（岩波新書）で日本語とタミル語の関係をとりあげて以来話題になっている。

私はインドには二度行った。『芸術新潮』が「アジャンタ石窟群」の特集をしたことがあって、写真家の大村次郎の撮った石窟の仏像の写真は圧倒的な迫力で迫ってきた。そして、ぜひ自分の目でこれを見てみたいと思うようになった。まだNHKに務めていた時で、ヨーロッパ出張の機会に3日ほど休暇をもらい、帰途南回りで訪ねてみることにした。

アジャンタ石窟はムンバイ（ボンベイ）から内陸に入った深い谷の断崖にある。19世紀の初めにイギリスの士官が虎狩りに出かけて発見されたもので、それまでおよそ千数百年もの間打ち捨てられていて、誰も顧みる人はいなかった仏跡である。

10メートルを越える断崖が穿たれて仏像や壁画が、回廊のようになっている。まるで仏の偉大さをその壮大さで表しているかのごとくである。敦煌の莫高窟の仏像は木の枠組みに藁などを巻き付け、粘土を塗って整形した等身大の彩色塑像が多い。アジャンタの仏像は断崖の一枚岩をくりぬいたもので、お顔は確かに仏像だが、ギリシャやローマの神殿のように、石柱にも彫刻がほどこされている。まるで、ギリシャかローマの遺跡の前に立っているのではないかという錯覚にとらわれる。

案内してくれたガイドさんが、運よく『芸術新潮』の写真撮った大村次郎さんのガイドを務めた人で、大きな洞窟に光をあてて写真を撮るかが、いかに困難な仕事であったかを、話してくれた。

インド人の宗教心といえばジャイナ教も想像を超えた世界であった。イギリス人と話していたらJane, Janeというので、女の子の話かとおもったらJain（ジャイナ教）のことだった。ジャイナ教は仏教に近い宗教で、生けとし生きるものを尊重する。地中のみみずを殺すといけなから、靴をはかず裸足である。空気中の蚊を吸い込んではいけなから、口にはマスクをしている。ジャイナ教の寺院を訪ねると、修行者が身になにひとつつけず真っ裸で庭に立ったまま、お経を読んでいる姿は崇高でさえあった。

インドを旅した人は「好きになる人」と「嫌いになる人」がはっきりしているようである。私は「好きになる人」で、NHKを定年退職した翌日から一人で10日ほどインド旅行をすることにした。まだ、『地球の歩き方』はあまり充実していたとはいえない時代で、頼りになるのはオーストラリア版の“Lonely Planet”一冊である。

ホテルの予約は東京からファックスで予約し、交通機関の予約はニュー・デリーの旅行会社に手配してもらうことにした。友達にその話をすると「大丈夫かよ。もし、その旅行社が空港にあらわれなかったら、どうするんだよ」などと心配してくれた。私は「まだ、お金をはらってあるわけではないから、きつとくるはずだ。もし、来なかったらニュー・デリーで

手配すればいい。もう会社へ行く必要はないのだから、ゆっくり旅するよ」といって出かけた。

案の定ニュー・デリーの空港の出口には「MR.KOBAYASHI」と大書した紙をもった男が迎えに来てくれていた。

日本語とタミル語

戦前の日本では日本語の祖先は神代から伝わる「やまとことば」であると信じられていた。戦後、古事記・日本書紀の神話が否定されたため、日本語は神代から日本列島に伝わることばだという神話が崩れてしまった。「日本人は何処から来たのか」「日本語の兄弟はどこにいるのか」、日本人は自身のアイデンティティーを失いかけていた。そんな時、1957年に大野晋は『日本語の起源（旧版）』（岩波新書）を出版した。大野晋は近代国語学再興の祖である橋本進吉の薫陶を受けた正統派の学者で、万葉集や日本書紀の研究で知られていた。その大野晋が『日本語の起源（旧版）』で主張したのは、古代日本語はアルタイ語、特に朝鮮語との関係が深いというもので、本も版を重ねた。

ところが、1981年になると大野晋は『日本語とタミル語』という本を新潮社から出版した。そして、1987年になると『日本語の起源』と同じ岩波新書で『日本語以前』を出版し、日本語は南インドのタミル語と同系であるという仮説を提示した。その後、1994年になると『日本語の起源（新版）』（岩波新書）を出して『日本語の起源（旧版）』を絶版にしまった。

日本人のなかでタミル語を聞いたことのある人も、タミル語の小説を読んだことがある人はほとんどいないと思われる。空想のなかのことばであり、ロマンを秘めたことばともいえる。大野晋は『日本語以前』のなかで、タミル語の人体に関する語彙をとりあげて、日本語と対比している。ローマ字はタミル語とその意味、() は日本語である。

日本語・タミル語（その意味）	日本語・タミル語（その意味）
妻、女(me)・mell-iyal（妻、女）、	かしら(kas-ira)・kat-ir（穀物の穂）、
顔(kaF-o)・ka-vul（頬、象の両顎）、	手(ta>te)・tol（二の腕、肩）、
足(as-i)・at-i（足）、	歯(Fa)・pal（歯）、
唾(tufa)・tupp-al（唾）、	背(sö)・cuv-al（うなじ、肩の上の部分、背後）
腋(wak-i)・pakk-am（肩から尻までの体側、近い所、側）、	
痘痕、あばた(mutt-ya)・mutt-u（痘痕、粒、水晶）、	

（『日本語以前』 p.116～より作成）

日本語にも読み方がアルファベットで示されている。どういう訳か、日本語の発音は「かしら(kas-ira)などとなっていて、日本語の特徴である開音節（母音で終わる音節が失われている。それにしても、頭が穀物の穂になり、顔が象の両顎に対応するなどということはあるのだろうか。「ミッチャ」という日本語は古語であり、方言だそうである。

大野晋のタミル語説にはかなりの反論もあり、学会の定説になったわけではない。日本でタミル語の専門家の数は限られていて、タミル語を知らない普通の人には反論のしようもない。

私はチェンナイに着くと”Tamil Dictionary & Phrasebook”と“A Reference Grammar of Spoken Tamil”それに”Learn Tamil in a Month”などの入門書を買って求めた。まず、どの言語にも共通だといわれる基本語彙として、人体に関することばを調べてみた。

体 udal、頭 thalai、額 netri、顔 muham、目 kann、まつげ kann myir、眉 kann puruvam、まぶた imai、耳 kaadhu、鼻 mookku、口 vaai、唇 udhadu、舌 naakku、歯 pal、顎 thaadai、頬 kannam、首 kazhuthu、背中 muthuhu、肩 thoal、胸 maarbu、腹 vayirh、胴 adi vayiru、手 kai、指 viral、腕 bujam、腰 iduppu、膝 madi、すね、脚 kaal、足 paadham、髪 mayir、妻 (“Learn Tamil in a Month”による)

もとより入門書のことであり不完全であるとしても、これからはタミル語と日本語語彙との関係は、ほとんどみえてこない。さらに、辞書を引いてみると、大野晋が日本語の妻、顔にあたるとしているタミル語が載っている。manaivi=wife、や kavul=the cheeks.the jaws of an elephant という単語があることはある。しかし、タミル語の manaivi が日本語の妻「め」とどのように音韻対応しているのだろうかということが疑問になる。また、「象の顎」がなぜ、日本語の「顔」に比定されるのかはまったく不明である。

大野晋は『日本語の起源』(新版)のなかでつぎのように述べている。「日本語とアルタイ語とを比較すると、文法的な構造はおよそ共通なのだが、単語の対応を見つけるのが非常にむずかしい。同系というためには、一に文法の仕組みの問題、二に何百という基礎語の問題がある。その双方について立証しなくてはならないのに、単語については証明できない。そこでアルタイ語同系説は足踏みせざるを得なかった。」(p.6)

そして、タミル語については「対応する単語が基礎語を中心に500語近くある。」としている。どうも私の見たところでは単語が対応しているようには思えない。

タミル語のふるさと

タミル語はインド南部で話されていることばである。タミル語のふるさとであるチェンナイの町はドラヴィタ族の町で、男性はたっぷり余裕のある白くてひざ下まである長袖のシャツで、風がシャツの中を吹き抜けるから涼しそうである。女性はサリーである。

空港からホテルまでタクシーに乗ると、運転手はタミル語しか話さない人で、そのほかに英語を話す助手がのっている。ホテルの名前を告げると走り出したが、しばらくするとタクシーは止まってしまった。助手が英語で「あなたの行くホテルは今日はお休みである」という。「私たちがいいホテルを知っているから、そちらへ行こう。安くていいホテルだ」というのである。私は東京で予約したホテルの予約済みのファックスを見せて、ホテルの予約票があるから大丈夫のはずだと主張する。インドはどこへ行っても英語がつかえるから、交渉がややこしくなっても大丈夫だ。彼らはホテルの紹介料がほしいのである。

- タミル語は格を表示するほかに、後置詞によって語と語の関係を示すこともできる。
- 否定形は動詞の後につく。undāka (生まれる) + illai (否定・ない)。これは日本語の否定のしかたと同じである。

確かに、名詞に助詞(接尾辞)がついて主語や目的語をあらわす膠着語の構造は日本語に似ている。動詞が文章の最後に来ること、否定辞が動詞のあとにつくことなども日本語の文法に似ている。しかし、動詞に人称や単数・複数の区別があることなどは日本語と違うようである。

もう少しくわしく見るために、マタイ伝の「主の祈り」の部分を見てみることにする。

9. だから、こう祈りなさい。「天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。

Nīngal jepam panna -vēndiya vidam-āvadu
 あなた方(主格) 祈る 必要がある 方法+というもの (は次のことである)

parandalangal-il -irukkira engal pitāv-ē
 天(複数) +に(場格) いる 我々の 父+(強調)

ummudaiya nāmam parisuttap-paduvad -āka
 あなたの(属格) 名前 讃えられること(受身・動名詞・未来) ありますように

- nīngal の2人称(丁寧)複数・あなた方。属格・斜格は ongal、与格は ongalukku である。2人称単数は nii、属格・斜格は on、与格は onakku である。
- engal は1人称複数(除外形)の属格。主格は nāngal である。除外形は「私ども」のように話しかける相手を除外した複数形である。包括形は主格が nāma、属格・斜格が namma となる。
- ummudaiya は2人称代名詞の属格・所有格「あなた」²として用いられる。

10. 御心が行われますように。天におけるように地の上にも。

Ummudaiya rājayam varuvad-āka
 あなたの 王国が(主格) 来ること(動名詞・未来)+ますように

ummudaiya chittam paramandala-ttil-e seyyap-padukiradu pōla
 あなたの 心が 天国+(場格)+(強調) なされること(受身・動名詞・現在) ように

būmiy-il-ey-um seyyap-paduvad -āka
 地上+で(場格) + (強調) なされること(受身・動名詞・未来) ますように

- rāja はサンスクリット系の言語で王。タミル語はサンスクリットからの借用語が多い。
- varu は口語で「来る」、文語は vaa

11. わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

Engalukku vēndiya ākārat-tai enru engalukku tār-um
 私たちに(与格) 必要な 食糧+を 今日 私たちに(与格) 与える+(丁寧な命令形)

- tār-um の um は相手が一人の場合、丁寧な命令形で「与えてください」あるいは「お

与えください」に相当する。

○ この文章の主語は不明だが、このままの語順でも日本語として通用しそうである。

12. わたしたちの負い目を赦してください。わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

engal kadanāli-galukku nāngal mannikkiradu -poola
我々の(属格) 債務者+に(与格) 我々が(主格) 赦すこと(動名詞・現在) ように
engal kadangalai engalukku maniny-um
我々の(属格) 借金(複数形)+を(対格) 我々に(与格) 赦してください(命令形)

13. 私たちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。

engalais sōtanaikku tpadap pannāmal
私たちを(対格) 誘惑に 囚われること(不定形) しないように
tīmaiy-ininru engalai iratchittukkoll-um
悪+より(奪格) 我々を(対格) 救い出してください(命令形)
rājyam-um valldaiy-um makimaiy-um enrenraik-kum
国+と 力+と 栄光+と 永遠+に
ummudaiyavaigal -ē āmen enbad -e
あなたのもの(複数形)+ (強調) アーメン というように+ (強調)

参考文献：Winslow “Tamil English Dictionary” New York 1862 (reprint 1979)

”English and Tamil Dictionary” New Delhi 1888,(reprint 1980)

Harold F. Schiffman “A Reference Grammar of Spoken Tamil”

Cambridge University Press,1999

カルパナ・ジョイ/袋井由布子『タミル語入門』南船北馬舎、2007

“A Reference Grammar of Spoken Tamil”によると、タミル語にはつぎのような特徴がある。○は日本語と同じ、●は日本語とは違う特徴を示す。

【統語】

- 文章構成の基本はS (主語) +O (目的語) +V (動詞) である。
- 格は後置詞で表示する。日本語は助詞をつける。
- 語順は形容詞+名詞である。
- タミル語では格は後置詞で標示される。日本語では助詞によって関係を表示する。
- タミル語では be 動詞は省略されることがある。
- 否定形は文の最後に ille (否定形マーカー) をつける。
- yes-no 疑問文では文の最後に aa (疑問マーカー) をつける。

【形態】

- タミル語には丁寧表現、尊敬表現がある。
- タミル語には尊称や謙讓表現がある。

- 動詞に人称・数・性（男性、中性、女性）の表示がある。動詞の人称・数・性は主語と一致する。
- タミル語には動詞に単数・複数の区別がある。
- 一人称複数には包含形（相手を含む）と除外形（相手を含まない）の区別がある。
- サンスクリット、アラビア語、英語からの借用語が多い。

【音韻】

- タミル語は開音節（母音で終わる音節）である。-k、-t、-p で終わる音節はない。
- 文語では r は語頭には立たない。古代日本語と同じ。
- 文語では濁音は語頭に立たない。朝鮮語や古代日本語と同じ。
- タミル語には l と r がある。

日本語とタミル語

大野晋は『日本語の起源（新版）』のなかで「日本語とアルタイ語とを比較すると、文法的な構造はおよそ共通なのだが、単語の対応を見つけることが非常にむずかしい。」としているが、タミル語についても共通の単語を見つけるのはむずかしそうである。文法の仕組みは日本語と違うところもあるが、日本語や朝鮮語が属する膠着語に近いように思われる。

インドにはサンスクリット系のことばとドラヴィタ系のことばがある。サンスクリットは古典ギリシャ語やラテン語と共通の起源から出ていることが、イギリス人のウィリアム・ジョーンズによって、すでに18世紀に指摘されている。ドラヴィタ語族は日本語を含むアルタイ系のことばに近いようである。

言語の系統論というのは、19世紀ドイツの言語学者シュライヒャーなどによって樹立されたものである。シュライヒャーは生物の系統樹と同じようにゲルマン語を最高峰とする言語の系統樹をつくった。これによって人種と言語は結びつき、人種の不平等論に発展して、アーリア人あるいはゲルマン人の優位を説いた。人類史において、インド・ゲルマン諸族が生存競争の勝者であるという、適者生存の考え方である。とくにナチスの台頭とともに、言語学もそのナショナリズムのために一役買うことになった。その思想は音楽家R. ヴァグナーの感激するところとなって歌劇『ニーベルングンの指輪』を生んだ。それはやがてユダヤ人の迫害へとつながっていくことになる。

すでに1866年のこと、パリに創設された言語学協会は、言語の起源と普遍言語の創造の問題は取り上げないと決めている。現在では印欧語比較言語学が描き出した「言語の系統」という概念を否定し、またしたがって同じ系統の諸語が共通にさかのぼる「祖語」という概念も否定されている。言語は交じり合う。純粋な言語というものはない。文字のない時代の言語を復元することは、あくまでも仮説であり、残された文字資料によって言語の類縁関係を調べる類型言語学という分野が探求されている。

インド一人旅

インドへの旅は東部の仏教遺跡を訪ねるのが主な目的だったので、コルカタ（カルカッタ）を経てバナラシ（ベナレス）、釈迦が悟りを開いたといわれるブッダガヤなどを回り、そして最後にタミル語の中心地チェンナイにたどりついたのである。

コルカタではゴルフ場のロッジに泊まった。そのゴルフ場は藍のプランテーションだったところを利用して作られたもので、“Lonely Planet”によると食事がおいしいと書いてあったので泊まってみることにした。藍染めに使う藍はインド木綿をそめるための原料で、インドという国名も藍(indigo)からきているという。

そこにたどりつくのも一苦勞であった。タクシーが橋の途中でガス切れになってしまったのである。橋は少し上り坂になっていて、そのために残り少なくなっていたガソリン・タンクのガソリンがエンジンに届かないのである。仕方なしに車を降りて。太鼓橋状の橋の頂上まで押してやった。下りになるとタクシーはようやく動き出したが、ガソリンを入れるお金がないから、少し金を貸してくれ、という。インドではタクシーは運転手が会社から車を借りて運転しているようで、運転手は自分でガソリンを買って営業しているらしい。

車が交差点に差し掛かって止まると、痩せこけて目だけが大きい赤ん坊をつれた女が寄って来て、可哀そうな子どもにいくらか恵んでやった欲しいという。インドでは物乞いする女に痩せた赤ん坊を貸す商売があるらしい。

SLの旅もした。汽車はインドのスローライフに合った乗り物である。駅に止まると、列車のなかに弁当の注文をとる人がやってくる。何人かの注文をとると店にもどって、注文の弁当を作って配達してくれる。その間列車は駅に20分～30分止まったままである。日本の駅弁のようにお茶がついているが、茶碗は弥生式土器のような使い捨ての器で、チャイを飲み終わったら割って土に返してやる。

駅前には人と牛や犬が屯している。犬や牛の糞を気にする様子もない。人も犬や牛と同じ動物であり、あらゆる動物が共生しているのである。

バナラシでは朝早く小舟を雇って、川べりで遺体を焼くのを見にいった。川べりには宿坊が並んでいて、衰弱した病人がガンジス河のほとりで死ぬるように、家族でガンジス河のほとりにやってくる。川べりは階段状になっていて、お金持ちは高価な香木を買って遺体を焼く。お金持ちでない人は普通の薪を買って焼く。貧乏な人は薪の残り火や、残った薪をもらって焼く。とにかく聖なる河のほとりで焼いてもらって、灰はガンジス河に流してもらいたいのである。

ガンジス河の濁った水のなかにはサリーを着たまの女性などが、聖なる水をあびている。こんなところでも、一人旅の日本人女性によく出会う。バックパッカーである。「あぶない目に会いませんか」と聞いてみると、ホテル泊りではなく、バックパッカーが大勢で泊まる宿なので、あぶない目にあうこともあります」とのこと。インドに来るバックパッカーはベテランで、すでにタイや東南アジアなどで経験を積んだ人が多いので、危機管理もできている人が多いようである。

旅が日常の世界を抜け出て、非日常を経験するものであるとすれば、インドの旅はまさに「旅」そのものである。

次回はヒエログリフ